

沢井余志郎さんと生活記録

写真の沢井余郎編『くさい魚とぜんそくの証文 公害四日市の記録文集』はる書房、1984年を四日市の市立図書館で目を通すことができた。沢井さんらしい編集の「記録文集」である。注目したのは、著名な社会学者・鶴見和子さんと人権「護民官」といわれる田尻宗昭さんが「序」を書いていることだ。表題の鶴見さんの「序」から紹介したい。



沢井余志郎さんは、戦後の生活記録運動(こどもの生活綴方と区別して、おとなのそれを、生活記録とよぶ)の草分けである。沢井さんには、生活記録の前史と後史がある。前史は、四日市の紡績工場で働く娘たちとともに書いた『母の歴史』などの仕事である。この仲間は、「生活を記録する会」と名づけられた。そして後史が、この本におさめられた四日市の公害の記録である。前史と後史とは、どのようにつながっているのだろうか。そして、どのような主題と方法の展開があるのだろうか。

沢井さんはつぎのように書いている。「その頃(「四日市が繊維産業の町から、石油化学コンビナートの町へと変って」いった頃)にも、生活を記録する会の娘たちが四日市に居れば、当然のこととして、紡績のヘイの中の生活を通して、四日市の大きな課題である、公害を記録する、反公害の運動に参加していたものと思う」。沢井さんは、娘たちの気持ちになりかわって、公害反対運動に参加したということであろうか。

1981年には、沢井さんもわたしも、伊那谷のかの女たちの家を訪れ、田んぼや畑を見せてもらった。そしてかの女たちが、ほんとうに、伊那の大黒柱であることをたしかめた。四日市と伊那とでの再会をとおして、わたしは、沢井さんの前史と後史とのしっかりした結び目を見つけたように思う。沢井さんは、伊那の大地に根をおろした、大黒柱たちの眼で、四日市の公害を見ているのであろう。そしてその大黒柱たちは、沢井さん自身が生活記録をとおして、育てたのである。

「公害の記録」は、必ずしも、自分で自分の歴史を書くことに固執しない。書いたものがあれば収録する。しかし、大部分は、沢井さんをはじめ第三者が、漁師や公害病の患者さんをたずねて、個人史をききとり書きしたものである。沢井さんは、ききとり書きをも、生活記録のはんちゅうに入れたといういみで、方法において、後史は前史よりも枠をひろげた、ということができる。

(2016年1月29日)